

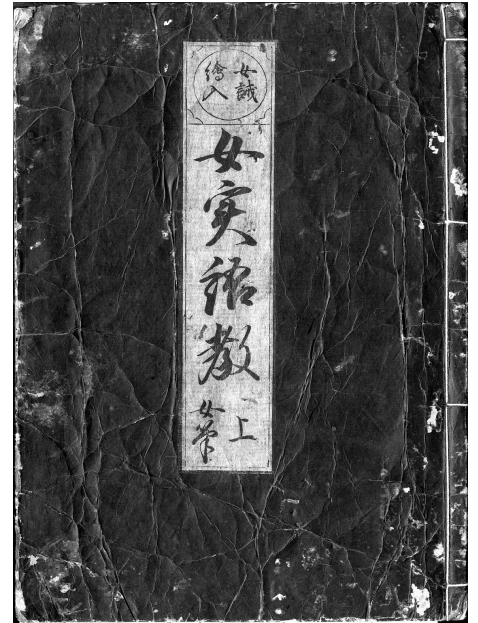
【読楽】028 「女実語教・女童子教」を読む *読楽箇所=全文

「女実語教・女童子教」の概要

〈女誠絵入〉女実語教・〈女誠絵入〉女童子教

【作者】居初津奈作・書。【年代】元禄8年(1695)刊。[京都]文台屋治郎兵衛板。

【概要】大本2巻2冊。近世流布本『女実語教(女童子教)』の初板本。上巻『女実語教』、下巻『女童子教』。本書以降、『女教訓鏡 囊(女実語教鏡囊)』『女実語教宝箱』『女実語教千代鏡』『女実語教姫鏡』『女実語教操鏡』『女実語教操種』など約30種の板種が生まれた。『女実語教』は「一、品勝たるが故に貴からず。心正しきを以てよとす」で始まる47カ条、『女童子教』は「一、夫、上つかたの御前には恭有て、立事をせざれ」から始まる128カ条の条々(合計175カ条)で、容姿よりも女性の心持ちの大切さを論じ、そのほか忠孝・礼節など諸般の教訓を説く。初板本は大字・4行・付訓の女筆手本で、本文の随所に津奈自画の挿絵を掲げる。沢田吉作・元禄13年刊『女今川』と同様に女性自身の著作であり、いずれも広範に流布した点で注目される。



「女実語教・女童子教」を読む

女実語教・女童子教 *本文は旧仮名遣いで表記(振り仮名は現代仮名遣い)。本文約5000字

序文

序

人の子の中に、男子は師をとりて学文をつとめさせ、家をとゝのへ、身をおさむる道をならはしむるもあれど、女子に至りては、をしゆる人もまれなり。女子はいくほどなくて他の家にとつぎ、夫にしたがひ、舅姑につかふまつるべきものにて、親の家に居る事、しばらくのあいだなれば、おさなき時より嫁たる道を教侍らずば、夫の心に背き、我かたさまの人に恥を見せん事、いかばかりうたてしき事ならずや。されば、明の太宗皇帝の御后は 忝くも、『内訓』二十章を撰ばせ給ひて、女のをんなたる道をしらしめ給ふ。漢の賢女、曹大家は『女論語』十二章を作りて貞女の道を教させ給ひ、『女誠』七章をあらはしては我御娘にしめしあたへさせ給ふ。唐の朝散郎陳邈の妻、鄭氏は『女孝経』一八章を撰びたまひて、その品々の教をあらはし給ふ。

しかれども、漢の書は、これらの女の読するべきにあらずとて、誰人か、これを大和言の葉にうつして『女四書』と名付て、こゝろざしあらん女の正しき道をしたひ、身をおさむべきたづき*とせられしかど、しもつかたの人は、そをだに事繁くおもほえ侍るにや、見るにしのびずして、正しき道はつやつや*2聞及ぶ人もまれなり。たまたま心ざしある女も、おなじならはしのみになりもてゆく*3事、をさをさ*4本意なきわざなれば、章を「実語教」「童子教」になぞらへ、聊『四書』の心を取り用ひ「女誠」の二字をかうぶらしめて*5手習う少女のもてあそびとなす事、寔に遠きにゆき、高きに

*1 たづき【方便・活計】=〔「手た付つき」の意。古くは「たづき」。中世以降「たづき」「たつき」。現代では「たつき」が普通〕①生活の手段。生計。②手がかり。手段。方法。よるべ。③(様子などを知る)手段。見当。

*2 つやつや=①完全に。すっかり。きれいさっぱり。②(下に打消の語を伴って)少しも。まったく。一向に。

*3 なりもてゆく=だんだん…になってゆく。

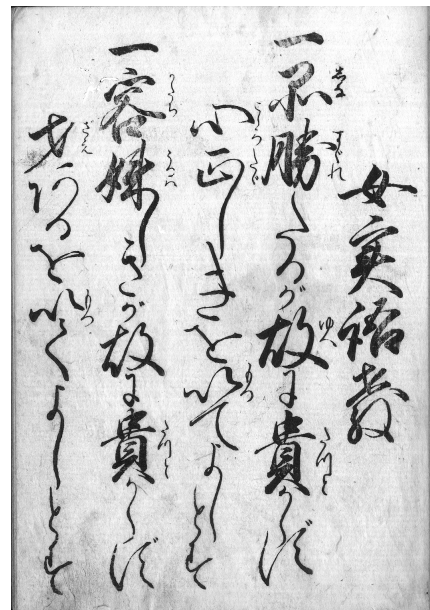
*4 をさをさ=(あとに打消の語を伴って)ほとんど。まったく。

*5 かうぶらしめて(被らしめて)=身に受けて、頂いて。

のぼる一つの助にちかゝらんかとしかいふ。

女実語教

- 1) 一、品勝たるが故に貴からず。心正しきを以てよしとす。
- 2) 一、容姝しきが故に貴からず。才あるを以てよしとす。
- 3) 一、富は是いけるうちの宝。身まかる時は別しりぞく。
- 4) 一、智恵は是万代の宝。命終る時は魂に随ふ。
- 5) 一、心をつゝしまざれば義なし。義なきは畜類にひとし。
- 6) 一、勤学ざれば才なし。才なきは草木にひとし。
- 7) 一、眉目かたちは衰ふ事有。貞女の名はくつることなし。
- 8) 一、幾の金をつむといへ共、心のすなをなるにはしかず。
- 9) 一、同腹^{*6}つねにあはず。妯娌^{*7}を姉妹のごとくすべし。
- 10) 一、かたちを色どることなく、心ざしをつゝしむべし。
- 11) 一、姿は日々にかしけ^{*8}、たましゐは年々に衰ふ。
- 12) 一、幼時^{いとけなきとき}手習ふ事をせざれば、としたけて悔共かひなし。
- 13) 一、故に物習ふにあく事勿れ。ぬひ針に怠る時勿れ。
- 14) 一、眠をのぞいて読書を学、飢を忍びて績綜^{*9}を習へ。
- 15) 一、姑にあひて業を学ざれば、家を持事かたし。
- 16) 一、夫に随ふといへ共、営疎なれば、身をたつるによすがなし。
- 17) 一、姑に成ては、よめを愛し、嫁は舅姑をうやまへ。
- 18) 一、富る家にとつぐといふとも、おごりたかぶる事勿れ。
- 19) 一、貧しき人の妻となるとも、清潔つとめ営むべし。
- 20) 一、父母は天地のごとし。舅姑は月日のごとし。
- 21) 一、夫はたとへば君のごとし。女は猶し従者のごとし。
- 22) 一、父母には朝夕に孝を尽し、舅姑には恭つかふまつれ。
- 23) 一、夫婦争ひ嗔事勿れ。理をまげてをつと(夫)に随へ。
- 24) 一、嫂にはうやまひをなし、弟娌には愛の心深かるべし。
- 25) 一、女として愛敬あらぬは、岩木の情なきに異ならず。
- 26) 一、嫁として孝の心なきは、鳥獣に異ならず。
- 27) 一、三の従を守りつゝしまずんば、なんぞ五の障^{*10}をまぬがれん。



*6 はらから(同胞) = 同じ母から生まれた兄弟姉妹。また、一般に兄弟姉妹。

*7 妯娌(兄嫁・嫂) = 兄の妻。

*8 かしく = やせ衰える。みすばらしくなる。やつれる。

*9 うみつむぎ【績紡】 = 麻や苧、綿や繭から糸を作ること。紡績。

*10 五障 = 仏教用語。女性がかつ5種の妨げ。女性は、梵天王、帝釈天、魔王、転輪王、仏になることができないことをいう。

- 28) 一、四恩^{*11}を報ずる心なくんば、誰か八苦^{*12}の身をたもたん。
- 29) 一、女は地獄の使なり。よく仏の種子をたつ。
- 30) 一、面は菩薩に似たりといへ共、心は夜叉のごとし^{*13}と説給へり。
- 31) 一、姑をうやまふは母のごとく、継子を愛するは子のごとくすべし。
- 32) 一、夫を恭ひつかふまつらば、夫又妻を恵 愍 べし。
- 33) 一、己、夫の親をうやまへば、夫又、己が親をうやまふ。
- 34) 一、我身をかざりおごらんよりは、まづ夫の衣をすゝげ。
- 35) 一、他の妻の邪なるをみては、みづから心を 嗜 べし。
- 36) 一、他の夫の正しきを見ては、みづから夫をいさむべし。
- 37) 一、善事を見ては 速 に進、悪事を見ては我身を 慎 。
- 38) 一、情ふかき人は 福 をかうぶ (被) る。声に木魂^{*14}のこたふるがごとし。
- 39) 一、妬ふかき人は 禍 をまねく。身に影のはなれぬがごとし。
- 40) 一、富るといふとも、貧 を忘れず、賤しき人をも 謾 事勿れ。
- 41) 一、或は始は榮へ、終おとろひ、或はさきに貴く、後に 賤 事有。
- 42) 一、それ習 勤て益あるは、績綜・縫針の業。
- 43) 一、又、学 覚えて助となるは、読書・糸竹^{*15}・敷嶋の道^{*16}。
- 44) 一、但、品^{*17}に随ひて法あり。又、身に应じて程あり。
- 45) 一、なをし家業を 疎 にせず、おさなき時は親に随へ。
- 46) 一、嫁てはをつと (夫) に随ひ、老ては子にしたがふべし。
- 47) 一、是、女の三従なり。身終るまで忘るゝ事勿れ。

女実語教 終

女童子教

女童子教

- 1) 一、夫上つ方^{*18}の御前には、恭 有て立事をせざれ。
- 2) 一、貴なる人には会尺 (積) して過よ。仰事あらば 敬 てうけよ。
- 3) 一、手をおさめ、しとやかにして向へ。そぞろに^{*19}外をかへり見ざれ。
- 4) 一、とひ給はずば、答へざれ。宣 事あらば、つゝしみて聞。

*11 四恩＝仏教用語。恩を受けていると考えられるものを4種に分類したもの。分類の方法もいくつかに分れる。(1)『心地観経』の説(父母の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩)。(2)『釈氏要覧』の説(国王の恩、父母の恩、師友の恩、施主の恩)。(3)『平家物語』の説(天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩)。

*12 八苦＝生・老・病・死の四苦に、愛別離苦(愛する人と生き別れる苦)・怨憎会苦(うらみ憎む人と会う苦)・求不得苦(求めるものが得られない苦)・五陰盛苦(心身のはたらきが盛んである苦)を加えた、八つの苦しみ。

*13 外面似菩薩、内心如夜叉＝顔は菩薩のように優しいが、心は夜叉のように険悪で恐ろしいの意。女性が仏道の修行の妨げになることをいった言葉。

*14 こだま[木霊・木魂・胡]＝樹木に宿っている霊。木精。②(古くは木の霊の仕業と考えていたことから)山・谷などで起こる音の反響。また、音・声が山・壁などに当たってはね返って来ること。やまびこ

*15 糸竹＝(「糸」は弦楽器、「竹」は管楽器)楽器。音楽。

*16 しきしまのみち[敷島の道]＝《日本古来の道の意から》和歌の道。歌道。

*17 品＝ここでは、地位。身分。家柄。

*18 上つ方＝《「うえつがた」とも》身分や官位の高い人。貴人。

*19 そぞろ[漫ろ]＝ここでは、「思慮のないさま。軽率」の意味。

- 5) 一、三宝には三度礼をなし、神明をば二度拝をすべし。
- 6) 一、御陵^{*20}を過る時は恐つゝしみ、社をすぐる時は深く敬へ。
- 7) 一、宮寺にまう（詣）づる時は、けがらはしきを慎べし。
- 8) 一、内外の書を取あつかひては、おろそかにいたすべからず。
- 9) 一、客人はよくあひしらひ^{*21}、夫にはよくつかふまつるべし。
- 10) 一、婦人、礼を正しくすれば、舅姑に義あり。
- 11) 一、嫁として礼義（儀）なければ、父母の名をくたす事有。
- 12) 一、人のがり^{*22}往て化言^{*23}をいはざれ。事とゝのほらば、早帰るべし。
- 13) 一、何にふれても友達にたがはず、いかり罵詈事勿れ。
- 14) 一、語おほき女は品少し。遊女のへつらひ、たはるゝ^{*24}がごとし。
- 15) 一、懈る女は酒をこのむ。遊女の客を翫がごとし。
- 16) 一、あだしき^{*25}女は、あやうき事有。いさぎよく貞女の道を守べし。
- 17) 一、鈍き女は、家を治事かたし。すみやかに勤營べし。
- 18) 一、詞は梱^{*26}より外へ出さずして、ひそかにしても譏事勿れ。
- 19) 一、身は住べき所^{いへ}にありて、家業の勤に懈る事勿れ。
- 20) 一、男は三徳^{*27}を治て迷事なく、愁る事なく、恐るゝことなし。
- 21) 一、女は三つの従ありて、五障の罪ふかし。
- 22) 一、ものいふ時は、静にいひて、唇をひらきあはずべからず。
- 23) 一、悦ばしきことにもいたく笑ず、腹立事にも甚怒べからず。
- 24) 一、ひとたび言葉をすごしては、世のそしり舌をかへさず。
- 25) 一、白珪は人をほめて名をとゞめ、離珪は人を誇りて悔有。
- 26) 一、禍と福には門なし。唯人のまねく所にあり。
- 27) 一、天の災はまぬかるゝ事有。自らの災は遁がたし。
- 28) 一、それ、善を行ふ家には悦ばしき事余り有。
- 29) 一、又、悪をなせる所には、わざはひ猶あまり有。
- 30) 一、人として陰の徳を行へば、かならず陽の報あり。
- 31) 一、夫として外をつとめば、女は内の營をなすべし。
- 32) 一、信ある人の門には、災の雲たなびく事なし。
- 33) 一、慈悲ある人の家には、さいはいの月ほがらか^{*28}也。
- 34) 一、心のひとしからざるは、面のごとし。水の器にならふがごとし^{*29}。

*20 みささぎ【陵】=天皇・皇后などの墓所。御陵。みはか。

*21 あいしらい=《「あえしらい」の音変化》対応すること。また、取り扱うこと。もてなし。

*22 人のがり=人のもと(に)。人のいるところ(へ)。

*23 あだごと【徒言】=あてにならない言葉。うそ。

*24 たわる【戯る】=くだけた態度をとる。また、ふざける。

*25 あだし【徒し・空し】=名詞の上に付いて、むなしい、実がない、変わりやすい、の意を表す。後世には、形容詞に活用させた用例も時にみられる。

*26 梱 =門や部屋の内外のしきり。

*27 三徳=人として守るべき三つの徳目。ここでは、「中庸」で言う智・仁・勇。

*28 朗らか=明るく光るさま。日ざしが明るく、空が晴れわたっているさま。

*29 水は方円の器に随う=水は、容器の形によって、四角にも丸くもなる。人は、交友関係や環境によって、よくも悪くもなるというたとえ。

- 35) 一、^{ひと}他の男をほめざれ、^{ひと}他の女をそしらざれ。
- 36) 一、姑の心ばせを見て、よめのいましめとせよ。
- 37) 一、嫂のおとなしきを弟嫁の師とすべし。
- 38) 一、善心つもりて幸を蒙り、悪念極りて災おほし。
- 39) 一、善人は死して誉を残し、悪人は死して譏を残す。
- 40) 一、貴き人の妻となるとも、^{やもめ}孀^{*30}をもあなどる事勿れ。
- 41) 一、よき人をもあらはすに誉ざれ。よからぬ人ねたみを含む。
- 42) 一、家に入ては作法をとひ、夫にあふては心ばせ^{*31}をとへ。
- 43) 一、舅に逢てはしうとに随ひ、姑にあひては姑に随へ。
- 44) 一、親類に行ては子共をとへ。愛敬^{*32}あらんがため也。
- 45) 一、女は三界に家なし^{*33}。夫の家を家とする也。
- 46) 一、愚にしておもんばかりなくんば、必ず近き愁有べし。
- 47) 一、管を用て天を窺^{*34}がごとく、針を用て地をさす^{*35}にひとし。
- 48) 一、神は悪人を罰し給ふ。苦しむるに非ず、こ（懲）らさんが為也。
- 49) 一、師匠弟子を戒むる事、にくむに非ず、直からしめんと也。
- 50) 一、生れながらにしてし（知）れるものなし。習勤て心をつゝしめ。
- 51) 一、貴き女はおとなしやか也。賤しき女はおごる心甚し。
- 52) 一、^{とめる}富といふとも、^{むさぼる}貪心多きは貧しき人にをとるべし。
- 53) 一、^{ますしき}貧といふとも、^{たのしむ}楽心あらば、富る人にまさるべし。
- 54) 一、^{よこしま}邪なる女をめとれば、家をほろぼすに遠からず。
- 55) 一、よろしき女をめとれば、^{とみ}富さかふるに程なし。
- 56) 一、夫に^{したがわ}随ざるをんなをば、早く里にかへすべし。
- 57) 一、和がざる女をなだめんとすれば、^{あだ}仇を生じてのゝしる事有。
- 58) 一、心に任せて頑なるは、野等猫（野良猫）の人に^{したがわ}随ざるがごとし。
- 59) 一、心をつゝしみて和らかなるは、飼鳥の人になるゝがごとし。
- 60) 一、^{よきひと}善人に^{すなお}随ひて直なるは、麻の中の^{よもぎ}蓬^{*36}のごとし。
- 61) 一、^{あしき}悪人にしたしみて曲れるは、藪の中のいばら^{*37}のごとし。

*30 元来、〈やもめ〉の語は《日本書紀》などには寡、寡婦の字があてられ、夫をなくした女、夫のない独身の女を意味し、妻をなくした男は〈やもお〉と呼ばれ、鰥の字があてられた。一方、〈女やもめに花が咲く、男やもめに蛆がわく〉という諺にみられるように、〈やもめ〉という言葉は男女双方をさすこともあり、また、結婚せずに独身を通す者に対して用いられることもある。

*31 ころばせ【心馳せ】=①平素からの心の働き。気だて。性質。②心配り。③深い考え。思慮分別。④日ごろの心がけ。心構え。

*32 ここでは、「好ましさを感じさせたり、笑いを誘うような言動や表情。愛想」。

*33 女三界に家なし=〔「三界」は仏語で、欲界・色界・無色界、つまり全世界〕女は三従といって、幼い時は親に従い、嫁に行つては夫に従い、老いては子に従わなければならないとされるから、一生の間、広い世界のどこにも安住の場所がない。女に定まる家なし。

*34 管見=《細い管を通して見る意》①狭い見識。視野の狭い考え方。②自分の知識・見解・意見をへりくだつていう語。

*35 針を以て地を刺す=《「説苑」弁物から》「小さな針で大きな地面を刺す」意から、貧しい見識で大きな物事に勝手な判断を下す。また、とてもできそうもないことを企てることのとえ。

*36 麻の中の蓬=《「荀子」勸学の「蓬麻中に生ずれば扶けざるも直し」から》蓬のように曲がりやすいものでも、まっすぐな性質の麻の中に入つて育てば曲がらずに伸びる。人は善良な人と交われれば自然に感化を受け、だれでも善人になるというたとえ。

*37 藪の中の荊=人は悪い環境や悪い仲間と交われれば、悪い人間になってしまうというたとえ。「荊」は、いばらのこと。藪の中に生えたいばらは、他の草木にじゃまされて真っ直ぐ育たないという意から。

- 62) 一、親にかゝり、姑に付ても、うみつむぎ・縫針をならへ。
- 63) 一、生つき愚也といふ共、習はゞ、自手利とならん。
- 64) 一、いち日に一針習へば三百六十針。
- 65) 一、ひとはりはほころびを補、一端仕立てば膚を隠す。
- 66) 一、ひと色の師をも疎に思はざれ。いはんや万習へるをや。
- 67) 一、趙孝婦^{*38}は、姑のために子を売て棺を調ふ。
- 68) 一、景伯の母、崔氏は子の為に九經^{*39}を教給ふ。
- 69) 一、朝には早起て髪けづり、舅姑につかふまつれ。
- 70) 一、夕にはをそく寝て身を治め、心の正しからん事を願ふべし。
- 71) 一、所帯をそまつにするは、酔ふして本心を失がごとし。
- 72) 一、義理をかき、礼を背は、万の畜類にひとし。
- 73) 一、女の酒に酔も見苦し。食にあきぬるもはしたなし。
- 74) 一、心を慎ざれば、眠を生ず。身安ければ奢を好む。
- 75) 一、恭公の後伯姫は、節義を守りて焼失給ぬ。
- 76) 一、鄭瞞は、行義（儀）を乱さずして、終に夫人^{*40}の位に上り給ふ。
- 77) 一、聞氏の女は、孝の志ふかく、姑の両眼をねぶ（舐）りて治す。
- 78) 一、張氏が妻は若して孀と成、貧しく営て姑を養ふ。
- 79) 一、顧徳謙が妻は、姑に孝を尽して、忽雷光の難をのがれぬ。
- 80) 一、これらの婦人は皆、昼夜に心をつゝしみ、
- 81) 一、義を守り、孝をつくして、名を後代にとゞめ給へり。
- 82) 一、縦綿をひき苧^{*41}をうむとも、忠孝の志を忘るべからず。
- 83) 一、又、物を縫、糸をつむぐ共、心に節義を守るべし。
- 84) 一、才ある人は、賤しけれ共、やんごとなき人にまじはる。
- 85) 一、愚なる人は、貴けれ共、賤のめにいやしめらる。
- 86) 一、父の恩は須弥山^{*42}のごとく、母の徳は巨なる海のごとし。
- 87) 一、恩をうけて恩を忘るゝは、木の鳥の枝を枯すにひとし。
- 88) 一、徳をかうぶりて徳を思はぬは、野の鹿の草を損にひとし。
- 89) 一、有りける^{*43}女は、二親の為、僧を請じて手箱に歌をそへて布施とす。
- 90) 一、ひとりの貧女は、父母の靈祭とて、只一つの衣に歌を添て仏供養す。
- 91) 一、南筑紫が女は、父の跡を慕て、尼と成て孝養をつとむ。

*38 趙氏の孝婦。元代、徳安応城の人。『新続列女伝』中巻27丁裏。「早く寡となり、姑に事えて孝、家貧にして織（*はたおり）に人に傭わる。美食を得れば、必ず持ち帰りにて姑に奉じ、自は鹿糲（*粗末な食物）を咬いて厭わず…」と記す。

*39 きゅうけい【九經】=中国の9種の經書。「詩經」「書經」「易經」「儀礼」「礼記」「周礼」「春秋左氏伝」「春秋公羊伝」「春秋穀梁伝」。一説に、「易經」「詩經」「書經」「礼記」「春秋」「孝經」「論語」「孟子」「周礼」をいう。

*40 夫人=他人の妻の、丁寧な呼び方。もと、身分の高い人の妻（昔、中国で、天子の後や諸侯の妻などの称）。

*41 からむし【苧・苧麻】=イラクサ科の多年草。茎から纖維をとって織物にする。「績む」=麻・苧などの纖維を細く長くより合わせる。紡ぐ。

*42 須弥山=インドが起源とされ、仏教の世界觀の中心にあると言われる高山。複数の山や川、海などの自然が表現されている。

*43 有りける（在りける）=さっきの。例の。

- 92) 一、微妙⁴⁴は遠流の父を慕て、白拍子⁴⁵と成て行衛を歎く。
- 93) 一、孝ある人は、仏神の憐によりて、願ひを満ずといふ事なし。
- 94) 一、生死の命は常ならず。早菩提⁴⁶を求むべし。
- 95) 一、煩惱⁴⁷の身は浄からず。すみやかに浄土を願ふべし。
- 96) 一、厭ふべきは堪忍界⁴⁸也。会ものはわかるゝの苦しみ⁴⁹有。
- 97) 一、恐るべきは六つのちまた⁵⁰也。生るゝ者は死するの悲しみ有。
- 98) 一、命はかげろふのごとし。朝に生れて夕に死す。
- 99) 一、身は權の花のごとし。日の出るを待てしばみ安し。
- 100) 一、綾錦のよそほひは、全後の世のたくはへに非ず。
- 101) 一、金白金のたぐひは、只此世ばかりの宝なり。
- 102) 一、驕をきはめ、身を飾は、更に仏道の助にあらず。
- 103) 一、やごとなき人の寵愛に預も、たゞ現世の楽しみのみ也。
- 104) 一、松竹の契をことぶきても⁵¹、露の命、消るに程なし。
- 105) 一、鴛鴦の衾⁵²をかさぬるも、若くうるはしき間也。
- 106) 一、女誠⁵³の七章といひて、女のいましめ七つあり。
- 107) 一、卑弱といふは、我身を謙退、心かたち和らかなるを云也。
- 108) 一、夫婦といふは、天地にひとしく、節義のたがはざるを云也。
- 109) 一、敬慎といふは、懈る事なく、ふかく慎む心をいふ也。
- 110) 一、婦行といふは、心だて正しく、いさぎよく、操を守るを云也。
- 111) 一、専心といふは、心を一筋にして舅姑につかふまつるを云也。
- 112) 一、曲従といふは、己が理を曲て、夫に随ひつかゆるを云也。
- 113) 一、和叔妹⁵⁴といふは、心よく妯娌・小姑に親しくするを云也。
- 114) 一、身を慎み、義をまもりて、慈悲の心深かるべし。
- 115) 一、飢たるものには食を施せ。施しは菩提のたね也。

*44 微妙(*人名) = 生没年不詳。鎌倉時代の白拍子。建仁2年(1202)3月8日、京都から鎌倉へ下向して、源頼家の前で歌舞を行う。その際、去る建久年中(1190~99)に奥州に流され、7歳で生き別れた父右兵衛尉為成の存否を知るために自分は白拍子となり、鎌倉へ下向したのだと頼家に訴えた。頼家と母の政子は奥州に人を遣わして調べさせたが、父はすでに死亡していることが分かり、同年8月15日栄西を戒師として出家、持蓮と号した。

*45 白拍子 = 平安末期から鎌倉時代にかけて流行した歌舞。また、それを演じる遊女。今様などを歌い、水干・立烏帽子・佩刀の男装で舞ったので男舞といわれた。のちの曲舞などに影響を与えたほか、能にも取り入れられた。

*46 菩提 = 仏陀の悟り、完全な開悟、涅槃の境地をなす智慧のことで、そこでは煩惱は断たれている。したがって俗に冥福の意味でも用いられるようになった。

*47 煩惱 = 仏語。身心を悩まし苦しめ、煩わせ、けがす精神作用。貪(貪欲)・瞋(瞋恚)・痴(愚痴)の三毒は根元的な煩惱。

*48 「堪忍土」に同じ。堪え忍ばなければならない世界。つまりこの世のこと。娑婆世界。

*49 「会者定離」 = 仏語。会う者は必ず離れる運命にあるということ。人生の無常をいう語。

*50 六つの巷 = 六道の分岐点。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの世界に至る六つの道が分かれる所。

*51 祝い事の景物である松や竹の因縁にあやかかって悦び祝っても…といった意味。

*52 鴛鴦の衾 = 男女が共寝する寢床。

*53 女誠 = 中国後漢の儒家書。班固の妹、班昭(曹大家)撰。孫女の嫁するにあたり、訓戒のために著わしたもので、卑弱、夫婦、敬慎、德行、専心、曲従、和叔妹の7篇から成る。「女大学」などの女訓書に影響を与えた。

*54 叔妹(しゅくばい) = 夫の妹。こじゅうと。

- 116) 一、貧しきものには宝を惜しまざれ。宝は菩提の障なり。
 117) 一、乏しき家に生れて、施すべき力なくんば、
 118) 一、他の施しをみるたびに、随喜^{*55}の心を生ずべし。
 119) 一、心にあはれみてひとりに施せば、功德大きなる海のごとし。
 120) 一、身の為にとて余多に施せば、報を得る事芥子^{*56}のごとし。
 121) 一、水を手向て廟をまつる人は、はやく仏の御心に叶ふ。
 122) 一、花を捧て仏を供ずる人は、速に蓮の台^{*57}にのぼる。
 123) 一、一念十念のちからは転輪王^{*58}の位にも勝れ、
 124) 一、妙法華経の聞法^{*59}は、三千界の宝にも勝れり。
 125) 一、上は孝養の心ざしふかく、中は夫につかふまつるべし。
 126) 一、下は遍愛敬をつくさんと、ともに貞心に慎守るべし。
 127) 一、おさなき人を道びかんが為に、女誠童子教を記す。
 128) 一、見る人そしる事勿れ。聞人笑ふ事勿れ。

女童子教 終

刊記

元禄八乙亥^{きのといいつがい} 歳弥生中旬
 居初氏女津奈書画之。
 文台屋治郎兵衛蔵板 [後印本＝京書林 錢屋庄兵衛版]

居初津奈について

●居初津奈の唯一の事跡——元禄3年(1690)『女書翰初学抄』序文

天降る日那に生なる葛の葉のうらむる事は宿世のえにしぞかし。其道々のことわざを露しらまほしきには、且恋しきは都なめり。僕 壮年の比、隙ある身となれり。よりにて、日比の本意こなりと八重の汐路をしのぎて、今、此九重にいたりぬ。住事二十とせに及べり。つみに思ふ道々をたどりて、其かたはしをうかざひ、我身には足れりと是をたのしみ、隙行駒のあしなみを草のたざしにかぞへ、和国の風雅を味ふならし。

爰にしれる人、一人の女子をもてり。是がために女文章のしるべならん事を書いてよと望める事数多 度なり。辞するに詞なくて、終に二札の文を書いてあたへぬ。彼人よろこびて『女文章鑑』と名付り。それもいつしか書林の手に渡りて梓に彫て世に行へり。今一人の女子ありて、又此書を望めり。よつて、つたなき詞を綴て『女書翰初学抄』と名付。これ偏に初心のためなりといふ事しかり。

居初氏女都音書之

○寛永17年(1640)頃生まれ、30歳(壮年)頃上京、40代後半に書家・画家として活躍、48歳頃、最初の著作、貞享5年(1688)『女百人一首』。86歳頃、最後の著作、享保11年(1726)『琵琶の海』。女筆指南をしており、手本の執筆を求められることも多かった。

○独創的・個性的な著作(作品数15点、自筆・自画の作品が多い)

貞享5年(1688)『女文章鑑』→ 正しく女性らしい言葉遣い

*55 随喜＝心からありがたく感ずること。もと、仏教で、他人の善行を見て心に歓喜を生ずること。

*56 芥子。カラシナの種子、また、それを粉末にした香辛料。ケシの種である「芥子粒」は、極めて小さいものにたとえられる。

*57 蓮の台＝蓮台。蓮華の形に作った仏像の台座。蓮華座。転じて、阿弥陀仏の浄土に往生する者が身を托するもの。

*58 転輪王＝インド神話で、正義によって世界を治める理想的帝王。仏教では三十二相・七宝を具備するとされ、天から感得した輪宝を転がして四州を治める。輪宝の種類により、鉄輪王・銅輪王・銀輪王・金輪王の四輪王がいる。

*59 聞法＝仏教用語。仏教の教法を自己をむなしくして聴聞することをいう。仏の教えを信じる第1段階として重要視されている。

元禄3年(1690)『女書翰初学抄』→ 詳細な施注と簡潔な書札。明治期まで多大な影響
享保11年(1726)『琵琶の海(女文章都織)』→ 軍書を含む古典教養

【津奈に関する新情報】

- ① 大津市本堅田の居初家 (現当主・居初寅夫氏) の第16代、居初四郎兵衛貞助(1578～1618)の娘で、貞助の代に堅田から京都へ出て家を再興。墓は浄国寺にあるという。(滋賀県教育委員会・三苫保久氏)
- ② 居初津奈の署名または同筆の奈良絵本・絵巻が多数ある(往来物よりもはるかに多い)。絵草紙屋等から依頼され、ほぼ職業として奈良絵本等を書いていた極めて珍しい女性の例。女流書家の窪田つな(大津住)と居初津奈は筆跡から同一人と認められる。(慶応大学・石川透『奈良絵本・絵巻の展開』)

参考——『実語教』『女実語教(異本)』

●実語教・童子教

【概要】『実語教』は平安末期の貴族の作、『童子教』は鎌倉前期の真言宗系の僧侶の作と見られるが、作者については中世から種々の俗説が生まれ、江戸時代では『実語教』は弘法大師作、『童子教』は安然和尚作とされた。二教は元来別々に流布したが、文安元年(1444)『下学集』序に「彼之実語・童子為教…」とあるように室町前期には二教合本のスタイルが生まれ、さらに近世ではほぼ例外なく合本されている。二教ともに5字1句、2句一対を基本とし、『実語教』が「山高故不貴、以有樹為貴…」以下96句、『童子教』が「夫貴人前居、顕露不得立…」以下330句からなる。内容は、『実語教』が主に「智」を礼讃し学問のあらしを初学者に諭す勸学教訓であるのに対し、『童子教』はこの世の因果の道理や儒仏の教えを諭した幼童訓・処世訓となっている。両教とも暗誦に便利であったために寺子屋教育でも広く教授され、多くの語句が俚諺・格言として庶民に深く浸透した。江戸時代には550種以上の刊本が出版され、板種の多さは往来物随一である。

実語教

山高故不貴	以有樹為貴 (山高きが故に貴からず／樹有るを以て貴しとす)
人肥故不貴	以有智為貴 (人肥へたるが故に貴からず／智有るを以て貴しとす)
富是一生財	身滅即共滅 (富は是一生の財／身滅すれば即ち共に滅す)
智是万代財	命終即隨行 (智は是万代の財／命終れば即ち随って行く)
玉不磨無光	無光為石瓦 (玉磨かざれば光無し／光無きをば石瓦とす)
人不学無智	無智為愚人 (人学ばざれば智無し／智無きを愚人とす)
倉内財有朽	身内才無朽 (倉の内の財は朽つること有り／身の内の才は朽つること無し)
雖積千両金	不如一日学 (千両の金を積むと雖も／一日の学には如かず)
兄弟常不合	慈悲為兄弟 (兄弟常に合はず／慈悲を兄弟とす)
財物永不存	才智為財物 (財物永く存せず／才智を財物とす)
四大日々衰	心神夜々暗 (四大日々に衰へ／心神夜々に暗し)
幼時不勤学	老後雖恨悔 (幼き時勤め学はずんば／老ひて後恨み悔ゆると雖も)
尚無有所益	故讀書勿倦 (尚所益有ること無し／故に書を読んで倦むこと勿れ)
学文勿怠時	除眠过夜誦 (学文に怠る時勿れ／眠りを除ひて通夜誦せよ)
忍飢終日習	雖会師不学 (飢へを忍んで終日習へ／師に会ふと雖も学ばずんば)
徒如向市人	雖習誦不復 (徒に市人に向ふが如し／習ひ誦むと雖も復さざれば)
只如計隣財	君子愛智者 (只隣の財を計ふるが如し／君子は智者を愛す)
小人愛福人	雖入富貴家 (小人は福人を愛す／富貴の家に入ると雖も)
為無財人者	猶如霜下花 (財無き人の為には／猶霜の下の花の如し)
雖出貧賤門	為有智人者 (貧賤の門を出づると雖も／智有る人の為には)
宛如泥中蓮	父母如天地 (宛も泥中の蓮の如し／父母は天地の如く)
師君如日月	親族譬如羣 (師君は日月の如し／親族は譬へば羣の如し)
夫妻猶如瓦	父母孝朝夕 (夫妻は猶瓦の如し／父母には朝夕に孝せよ)
師君仕昼夜	交友勿諍事 (師君には昼夜に仕へよ／友に交はつて諍ふ事勿れ)
己兄尽礼敬	己弟致愛顧 (己が兄には礼敬を尽くし／己が弟には愛顧を致せ)
人而無智者	不異於木石 (人として智無きは／木石に異ならず)
人而無孝者	不異於畜生 (人として孝無きは／畜生に異ならず)
不交三学友	何遊七覺林 (三学の友に交はらずんば／何ぞ七覺の林に遊ばん)
不乘四等船	誰渡八苦海 (四等の船に乗らずんば／誰か八苦の海を渡らん)

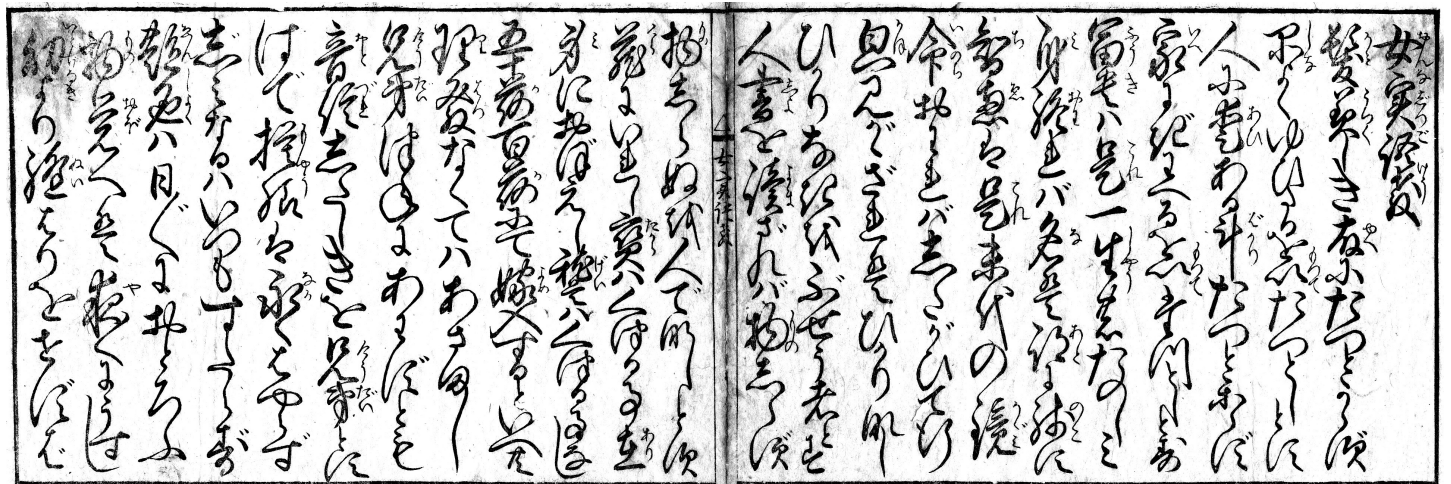
八正道雖広 十悪人不往 (八正の道は広しと雖も／十悪の人は往かず)
 無為都雖楽 放逸輩不遊 (無為の都は楽しむと雖も／放逸の輩は遊ばず)
 敬老如父母 愛幼如子弟 (老いを敬ふことは父母の如し／幼きを愛することは子弟の如し)
 我敬他人者 他人亦敬我 (我他人を敬へば／他人亦我を敬ふ)
 己敬人親者 人亦敬己親 (己人の親を敬へば／人亦己が親を敬ふ)
 欲達己身者 先令達他人 (己が身を達せんと欲せば／先づ他人を達せしめよ)
 見他人之愁 即自共可患 (他人の愁いを見ては／即ち自ら共に患ふべし)
 聞他人之喜 則自共可悦 (他人の喜びを聞いては／則ち自ら共に悦ぶべし)
 見善者速行 見悪者忍避 (善を見ては速やかに往く／悪を見ては忍ちに避けよ)
 好悪者招禍 譬如響応音 (悪を好む者は禍を招く／譬へば響きの音に応ずるが如し)
 宛如隨身影 修善者蒙福 (宛も身に影の随ふが如し／善を修する者は福を蒙る)
 雖富勿忘貧 或始富終貧 (富めると雖も貧しきを忘ること勿れ／或ひは始め富みて終はり貧し)
 雖貴勿忘賤 或先貴後賤 (貴しと雖も賤しきを忘ること勿れ／或ひは先に貴く後に賤し)
 夫難習易忘 音声之浮才 (それ習ひ難く忘れ易きは／音声の浮才)
 又易学難忘 書筆之博芸 (又学び易く忘れ難きは／書筆の博芸)
 但有食有法 亦有身有命 (但し食有れば法有り／亦身有れば命有り)
 猶不忘農業 必莫廢学文 (猶農業を忘れざれ／必ず学文を廢すること勿れ)
 故末代学者 先可案此書 (故に末代の学者／先づ此書を案ずべし)
 是学問之始 身終勿忘失 (是学問の始め／身終はるまで忘失すること勿れ)

●女実語教(異本)

【概要】作者不明。享保6年(1721)以前作。異称『躰実語教』。元禄8年刊『女実語教・女童子教』とは全く異なる72カ条の女子教訓。男子一般の『実語教』からの文言借用が目立ち、元禄版よりも一層『実語教』に似通う。「髪美しき故にたつとからず、品よくゆひたるを以たつとしとす…」で始まり、一代限りの富貴と万代不易の智慧を対比させて、才智を磨く学問への努力、嫁入り後の心得や婦人の勤め、孝行・貞節等の人倫を纏々説いたうえで、最後に手習いの徳を強調し、「農人の娘たりとも文章を読、物を知べし。其ゆへに、当世の親は先、娘に手習をさす。是、教訓のはしめ、身終返わする事勿れ」と結ぶ。本書は享保6年刊『女要珠文庫』の頭書がその最初で、続いて、これを模倣したと考えられる単行本『女実語教(異本)』も江戸中期に刊行された。

女実語教(異本)

髪美しき故にたつとからず。	品よくゆひたるを以たつとしとす。
人に①ある斗たつとからず。	家にぎわへるを以たつとしとす。
②は是一生のたのみ。	身終れば③は跡に残す。
④は是末代の鏡。	命おわれればしたがひて行。
児みがざればひかりなし。	ひかりなきを⑤者とす。
人書を読まざれば⑥しらす。	物しらぬを⑦とす。
⑧にいれし宝はくつる事在。	身におぼえし⑨はくつる事なし。
五十荷百荷にて嫁入するといへ共、	⑩なくてはおさまし。……以上、画像1枚目の前半部



嫁入りてめいしつては下
 こころはばあか人なり
 そのあはは漬漬とあは
 信申ふおこころのあは
 何ぞのあはれをいふも
 心はこぼしてあはれは
 恨むじつとては偽りな
 いづれからかたしつて
 射向とていふたさやい
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは

あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは
 あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは

こころはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは
 あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは

あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは
 あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは

あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは
 あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは

あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは
 あはれはあはれとあは
 只憐のあはれあはるる
 恨みはあはれをいふも
 夫六郎のあはれとあは



*以上が『女実語教(異本)』の全文です。
 全文のくずし字解読にチャレンジしてみてください。